

当院病理検査室におけるタスクシフト／シェアの取り組み

◎西村 奏子¹⁾、山田 茉樹¹⁾、瀬寄 翔太¹⁾、池谷 知也¹⁾、古田 政敏¹⁾、水野 章吾¹⁾、加藤 好洋¹⁾、直田 健太郎¹⁾
聖隷浜松病院¹⁾

【はじめに】厚生労働省より医師の働き方改革を進めるためのタスクシフト/シェアが推進されている。当院検査部病理検査室では現在2名の常勤病理専門医で年間14000件を超える組織診を行っており、病理医は長時間労働を強いられている。そこで、病理医の業務負担を軽減するため、技師による一部手術検体の切り出しとバーチャルスライドスキャナを使用した乳癌のバイオマーカー計測に取り組んだ。

【方法】手術検体の切り出しは病理医と相談し胆嚢、子宮頸部円錐切除検体、消化管ESD検体を対象とした。まず技師が病理医より指導を受け習得、その後技師同士で切り出し方法を共有した。乳癌バイオマーカー計測はバーチャルスライドスキャナ Nano Zoomer S210(浜松ホトニクス株式会社)による画像取り込みと画像解析システム e-Count3V96(e-Path 株式会社)を使用し、ER、PgG、Ki-67、p53の発現率計測を行った。いずれの取り組みも2021年8月から開始し、2022年3月までの期間に提出された症例に関して検討した。

【結果】対象期間における技師による切り出し件数は胆嚢135件、子宮頸部円錐切除検体44件、消化管ESD検体27件だった。1検体あたりの作業時間が胆嚢約5分、子宮頸部約7分、消化管ESD約15分であり、年間約23時間タスクシフトすることができた。

乳癌バイオマーカー計測の件数は320件だった。1件あたり約12分であり、年間約64時間タスクシフトすることができた。

【まとめ】タスクシフト/シェアを行った結果、病理医の業務時間を約87時間減らすことが出来た。しかし、病理医の業務量は依然として多いため、技師による手術検体切り出しの臓器種の追加、画像解析システムを使用した細胞計測の項目追加等を今後も検討していきたい。一方で技師の業務量は増えてきたため、業務の簡素化や業務習得者の増員等を行うことが今後の課題である。

連絡先 聖隷浜松病院病理検査室 053-474-5875